

# risk management

“声出し”という言い方は、声を出すことそのものに価値があるみたいで、私は好きではない。大切なのは、声を出すことによって生じるプラスの効果と、声を出さないことによって生じるマイナスの効果をちゃんと理解しておくこと、その上でどれだけ効果的に声を出すか、ということである。

声を出すことの一つ目の効果は、自分や周囲のチームメイトを元気にすることである。元気があればナンでも出来る。ただし、こちらの効果については別の機会に譲るとして、今回は本当に大切な（「背に腹は代えられない」というレベルで重要な）二つ目の効果について考えたい。それはダブルスの試合で……。

後衛が前衛にかける「ガンバ！」と「ハイ！」について。

相手の打ったロブがふらふらと浅いところに上がって、それを前衛がハイボレーで処理しようとしているときに、後衛は「ガンバ！」と叫ぶ。しかし、それは前衛を「頑張れ」と励ましているわけではない。「そのボールは（前衛の）お前が責任を持って処理しろよ！オレ（後衛）はそれを追いかけて、次のプレーに備えて動くからな」という意味である。逆に「ハイ！」と叫んだら、「ダメだ、その体勢で（前衛の）お前が手を出したら絶対ミスするから、早くラケットを引っ込めろ！オレはお前よりずっといいポジションにいるから、任せろ！」という意味である。

次に前衛が後衛にかける「ハイ！」と「頼む！」について。

相手の打ったロブがふらふらと浅いところに上がって、それを前衛がハイボレーで処理しようとしているときに前衛が叫ぶ「ハイ！」は、「大丈夫！このボールは（前衛の）オレが処理するから信じてくれ。だから（後衛の）お前はこのボールは追いかけて早く次のプレーに備えろ！」の意味。逆に、「頼む！」は、「ごめん！このボールは（前衛の）オレが処理すべきかもしれないけど、ちょっと無理みたいだ。（後衛の）お前に任せろぞ、頼むっ！」の意味である。

「ガンバ！」「ハイ！」「頼む！」の SHOUT は、一瞬遅れただけで、言わなかったのと同じ結果を招いてしまう。だから、一瞬の間に、迷わず決断して叫ばなくちゃならない。0.01秒を争うのだ。だって、緊急事態なのだから。今、コートの上では危機管理体制を問われる一大事が起こっているのだから。そもそも、いつも声を出して大騒ぎしてくれる後衛と組めば、前衛はペアが今どこにいるのかを常に確認しながらプレーすることができる。ふり返って後衛の動きを確認するなど言語道断。戦士が敵に背中を向けるのは、負け戦で逃げ出すときだけである。

そのためには、どんな備えが必要だろうか？それは、コートの上では、緊急事態ではない時でも、危機管理体制を問われていなくても、普通の時に、普通の気持ちで、大きな声を普通に出せるようにしておくことである。